

$$\begin{array}{r} 1 \\ 3 \\ + \end{array}$$

二年前

「大丈夫、こわがらなくていいよ。僕はユーリ。ロシアから来たんだ。君の隣にいるのは、デジモンだろう？ 僕の後ろにいるのもデジモンさ。見た目はぜんぜん違うし、僕の方が大きいけどね。僕と君はパートナーデジモンを持つ仲間なんだ。」

君が今家族のところへ戻れないのも知ってる。辛い目に遭ったと聞いてるよ。でももう大丈夫だから。これから安全に暮らせるところへ行くんだ。

もうすぐ迎えが来る。すつごく頼りになる人たちなんだ。今までなんども世界を危機から救ってきた。僕と年はあまり変わらないけどね。

ニッポンって国は知ってる？ そこから来るんだ、いい人たちだよ。ヤガミタイチさんと、イシダヤマトさん」

北欧のある国の山奥。街灯もなく山に沿って道が一本通っているだけ。その道から少し登ったところに洞窟がある。その前に巨大な昆虫型のデジモンがじっと待機している。ユーリのパートナーデジモン、クワガーモンだ。遠くからエンジン音が聞こえてきたのはそれから三時間後だった。

「ユーリ、遅くなつて悪かつたな！」

ライトの光芒の奥から人影と、小さな影が近づいてくる。最初に声をかけたのはアウトドアショップで買った、ざっくりとした青い防寒パーカーの八神太一。そして小さな影は

「おつまたせー」

オレンジ色の小さな恐竜のようなデジモン、アグモンだ。

車の反対側、運転席からは黒い革コートを着た石田ヤマトが出てきた。後部から青い毛皮をかぶったデジモン、ガブモンが続く。

ユーリが洞窟の入り口まで来た。

「太一さん、ヤマトさん」

ヤマトは襟を合わせた。

「うー寒い、早くゲート開けるとこまで戻ろうぜ」

「オレの毛皮貸そうか、ヤマト」

「いいよガブモン。それより」

英語に切り替えてユーリに向いた。

「その子、言葉は」

「英語ならなんとか通じるみたいですよ」

太一もそれくらいならわかる。

「よかった、任せたぜヤマト」

「おい」

「英語なら伊織もできるだぎゃー」

車後部から直立したアルマジロのようなデジモン、アルマジモンが降りてきていた。その奥の少し古めかしいコートを着てる火田伊織は戸惑うように答えた。

「え、まあまあ」

世界中に増加中のパートナーデジモンを持つ子どもたち。すでに子どもでなくなった世代も出てきているので、総称としてパートナーヒューマンと呼ばれるようになり、PHと略される。年に二倍の速度で増加している彼らは現実世界でトラブルに遭うことも多くなった。犯罪に巻き込まれる。政府に軍事利用しようとする。宗教的な問題も出てきた。

たいていはパートナーデジモンをデジタルワールドに送り返すことでなんとかなった。デジモンがいなければPHはただの人間で、特殊な能力があるわけではない。だがなかにはパートナーデジモンを持つということだけで異端視され、家族や隣人に迫害される場合も出てきた。

太一たちはそういう生家で暮らしていけなくなったPHを救出する活動をしてきた。それは太一が高校の頃から少しずつ始め、数年の間に次第にシステム化されていった。

泉光子郎が世界中のPHと連絡して情報を集める。危険な地域の場合も多いので戦闘力に優れたデジモンをパートナーに持つ太一とヤマトが乗り込む。デジタルワールドへのゲートを開く能力を持つ大輔たち六人のうち一人が随行してゲートを開く。

助けられた子どものメンタルケアも含めて、空やヒカリが救出された子を受け止め、生活を整える指揮をする。最年少の伊織は高校生になってやっと参加が認められ、ゲートを開くために同行してきていた。

太一たちが来るまでの間だけ少年を保護するという役目が終わり、ユーリはクワガーモンにまたがった。

「じゃ、あとは任せましたよ！」

伊織が手を振る。

「ありがとうございます！」

クワガーモンが飛び去り、太一たちの車は山道を走り始めた。

後部座席で伊織が英語で優しく少年に語りかける。

「君、名前は？ 僕は火田伊織。十六歳だ」

名前は知っているのだが、あえてそう話している。

「前の席、運転してるのが石田ヤマトさん。隣が八神太一さん」

ヤマトは前を向いたまま隣へ話しかけた。

「太一も英語くらいしゃべれるようになってよ。就職にも有利だぞ」

「わかってるよ。フランス語なら少しはいけるんだけどなあ」

「？ あ、うちの爺さんとこ行ったんだっけか」

「それよりヤマト、免許もつてるとは知ってたけどちゃんと国際免許まで取ったのか」

「爺さんの遺言でな。お前も免許だけでもあればいざとなったらアニメの制作進行に就職もできるぞ」

「やだよ、そんなの」

アグモンとガブモンは最後部、三列目のシートにいた。

突然アグモンが叫んだ。

「太一！ デジモンの匂いがする」
ガブモンが続く。

「この車じゃないところから」

伊織の横でアルマジモンが後方に向いた。

「ビハインドアスだぎゃ」

伊織もすぐに後ろを見た。街灯も他の街からの明かりもない夜空の奥から鳥の
ような物が近づいてくる。

「大きいです、ユーリのクワガーモンじゃない」

太一にも見えた。鳥型デジモンの鋭い鉤爪がもうすぐそこまで来ている。

「よける！」

ヤマトがハンドルを切る

「く！」

左にそれる車。鉤爪が空を切った。

黒い鳥型のデジモンはそのまま前方に飛び去る。その先で上昇し、大きく旋回するのを太一は目で追った。

「また来る！」

「くそ！ まだゲート開けるとこまで距離あるぞ！」

太一は後ろの席に顔を向けた。

「伊織、スマホからでもゲート開けるんだよな」

「ええ、ネット接続さえできれば。ですが」

「電波きた！」

伊織のまえに太一の手のスマートフォンがむけられた。

「ゲート開け、伊織。その子とおまえだけでも先に行くんだ」

「でも」

旋回した鳥型デジモンが、横から迫る。

ヤマトは急減速。車の鼻先を鉤爪がかすめる。すかさず急加速。

「くあっ！ 迷ってる暇はねえ！」

「わかりました！」

伊織は、ゲートを開く機能のあるデジヴァイス、D3を太一のスマートフォンに向けた。

「デジタルゲート、オーブン！」

液晶画面に光がうごめき、まばゆく発光した。ゲートが開いたのだ。

「さ、君から先に！」

伊織がうながす。それまで不安げにじっとしていた少年は小さなデジモンを抱きしめて光に近づいた。その行動に迷いが無いのは危険に対応するのが身についていたのかもしれない。少年は流れる影となって光に吸い込まれた。伊織、アルマジモンが続く。そして光が収まり元の暗さに戻った。

「いっちゃった」

後部からアグモンとガブモンが顔を出した。

「オレたちはどうするの」

ヤマトはわずかに口元をほころばせている。

「決まってるだろう」

太一が後部に目を向けた。

「いけるな、アグモン！」

「もちろん！」

二人のデジヴァイスが同時に後部に向けられる。液晶画面のゲージが急速に上昇し、車前方から高空まで二本のゲージが一気に駆け上る。そこには人に感知できないデジタルワールドのデータベースとの境界がある。地球全体を薄い雲のようには覆う見えないネットワークだ。そこにゲージの信号が届くと接触点から光が炸裂した。膨大なデジモンの進化データの中から二つの光に適したものが選ばれ、地表に送り出される。二条の二重らせんが急降下して車体後部に到達、車内に光があふれる。信号はアグモンとガブモンに回転をもたらし、形態情報が書き換えられ、質量まで呼び込む。

「アグモン進化」

「ガブモン進化」

疾走する車体のバックドアが開き、あふれる光芒の中からアグモンだったものが飛び出した。地上に着地するまでに数倍の大ききとなる。

「グレイモン！」

続いて飛び出したガブモンだったものが大きな狼のような形に変化した。

「ガルルモン！」

後方から近づいていた鳥型デジモンに二体はそのまま飛びかかる。鳥型は鉤爪をふるい、大きな翼を羽ばたかせてなんとかグレイモンたちを振り払った、が。

「メガフレイム！」

グレイモンの口から放たれた火球が直撃した。ふらつき、山間に下降していく。その上にガルルモンが跳躍してきた。口から青い炎を吹き出す。

「フォックスファイヤー！」

炎はかろうじてかわした。しかしガルルモン本体がのしかかり、もつれ合いながら森の中に落ちる。グレイモンも追って森に入っていく。奥で戦いが繰り広げられているのだろう、何本もの木がちぎれ飛び、炎や光がこぼれる。

山裾を大きく回る道の先からもその光が見えた。すぐに決着がつきそうではないことを太一は察した。

「完全体か」

運転の手を止めないままヤマトが答える。

「もう一段進化いくか」

「いや待て」

森から鳥型が飛び出してきた。姿勢が不安定だが、外傷はそれほどでもないらしい。グレイモンたちが届かない高さまで上昇してから向きを変えた。両翼の爪が暗い光を放ち始める。

「やばい！ よけろ、グレイモン！」

発射されたエネルギーが森の一角を瞬時に炭化させた。しかしそこにはもうグレイモンたちはいない。反撃の火球と青い炎が、焼けた森の両側から鳥型に飛んでいく。

グレイモンとガルルモンの共闘の歴史は長い。絶妙に避けきれない二方向からの攻撃で鳥型は右翼と尾羽にダメージを受け、ふらつき、きりもみしながら下降していく。だがその落ちる先の空間が歪み、別の光景を映しはじめた。その先は昼間の明るさだ。

「ゲートだ」

太一が見てる間に鳥型デジモンは明るい空間に飛び込んでいった。そのゲートはそこで閉じなかった。山裾をすると上昇し、太一たちの車に近づいてくる。

「やばいぞヤマト」

「わかってる！」

全速で走る車に、グレイモンたちが駆け寄ってきた。この速度ならゲートには追いつかれるはずがない。ところが横から近づいていたゲートが、急に移動し、車の前方にまわった。夜道の向こう、明るい空間に太陽が見える。車もグレイモンたちも急には止まりきれず、そのままゲートに入ってしまった。

光に目が慣れてきた。

周囲を見回す。

砂漠だった。

多少の起伏と、何かわからない構造物のようなものがいくつつかある以外は、見渡す限りの砂漠に太陽が強く輝いていた。

「どこなんだよ、ここ」

「あのときは参ったよなあ」

もちろんその砂漠がデジタルワールドであろう事はわかっていて。そうはいってもデジタルワールドも広い。そのどのあたりなのかは全くわからない。それでも光子郎たちに連絡がつけば問題ないと、気楽に考えていたのだが。

「結局三日もかかったもんなあ」

それからもう二年かと思いつながら太一は冷たいお茶のグラスに口をつけた。

「まあこちらは大変でしたから」

太一の向かいに座った井ノ上京（いのうえみやこ）のグラスはアセロラドリンク。ポケットの多い赤いジャンプスーツと合わせたのかもしれない。

「いまだにデジタルワールドとの連絡の接続が切れた原因はよくわかってないし、多分その後の震災の前触れのなにかが影響してたと思うんですけど」

お台場の対岸、芝浦の倉庫街の一角。周囲に比べるとやや小ぶりで、そのわりに頑丈そうな倉庫に、よく見ると「泉研究所」と看板が出ている。泉光子郎が所長を務める研究所だ。その応接室に太一はいた。

京はまだ大学生で、正式にはこの研究所の所員ではなくバイトの立場だが、所長ともう一人の所員が研究に没頭してばかりいるので実質的にいろいろな雑務をほとんどこなしている。常に何かしらの道具が入ったボディバッグを離さない。いかにも事務所で殺風景だった応接室がそれなりにくつろげる雰囲気になってるのは彼女が飾り付けや照明を工夫したおかげだ。

「揺れが来たっていつても、何時間もあとだったのに。先に接続に影響したって言うのも変とは思うけどさ」

光子郎たちに原因が掴めないものは自分にわかるはずもない、と太一は諦めている。そもそもデジタルワールドとの連絡がどういう理屈で通じてるのか、いまいちよくわかっていないのだ。

「伊織とあの少年を無事にキャッチ出来てたっていうのは良かったけど」

伊織の聞いたゲートの先はもちろん光子郎が把握してすぐに受取チームに連絡を取った。その後から接続が切れてしまったのだ。

「泉先輩、いや、所長はそのことまだ気にしてますよ。原因わからないとイライラするらしくって」

「まあしょうがないよなあ、そういう性分だし」

今も研究の途中で手がはなせないからと待たされたままだ。

「揺れたあとは接続どころじゃなくなってる」

京が思い出話を続けた。太一も後から聞いてはいる。

二年前のその日。太一、ヤマトたちがデジタルワールドの砂漠に迷い込んでから数時間後。こちらの世界を厄災が襲った。関東から東北にかけて大規模な地震が起き、津波も発生した。その時はまだ今いるこの芝浦の研究所が開設したばかりだった。電話や交通網も不安定になっていく中、武之内空や城戸丈、一乗寺賢がここに集まった。自分たちはどうすべきなのか、話し合った。

災害で困っている人がいる、すぐにでも助けに行くべきと主張したのはたまたまアメリカから帰国していた太刀川ミミだった。

彼女はその十年前、二〇〇一年のニューヨークで大きな事件に遭遇している。そのときアメリカ中のパートナーデジモンを持つ子どもたちが集まり、瓦礫から人を救出する助けをするのを見ていた。光子郎がオンラインで連絡を取ってはいしたが、直接会う機会がないままだったアメリカの仲間とはそうして知り合った。言うまでもなくデジモンは普通の人間にない力をもつ。それですこしでも役に立てればと集まったのだが。

「全体から見れば大した効果なかったかもしれない。でもできることをやろうとしたのがよかったのよ、ってミミさん言ってる」

今の自分たちもなにかやらなきやとミミは焦っていた。

しかし、彼らのデジモンはみなちようどデジタルワールドに帰っているときだった。

デジモンたちはずっとこちらの人間世界にいると少しずつ体調が悪くなってしまう。ある程度定期的にデジタルワールドに戻らなければいけない。自分たちだけでできることは限られてるが、デジモンがいれば。そのデジモンたちと連絡がつかないのだ。

城戸丈は慎重論をとなえた。今行っても自分たちにできることは多くない。仮にデジモンに頼らずボランテイアに向かうとしてもそれはそれなりの準備も交通手段も必要だ。気持ちだけで行っても何もできないばかりか邪魔になるだけかもしれない。何より彼らはただの学生でしかない。

そうしているうちに津波の被害が知らされてきた。自分たちにもたらされたデジモンという力は、こんな時に何もできないものなのか。彼らは徒労感に包まれてしまった。

「あんなとき、太一さんや大輔くんがいればみんなの気持ちもちよっと違ったんでしょうけど」

本宮大輔と高石タケルは伊織と少年の救出に、八神ヒカリはそのバックアップにデジタルワールドへ行っていた。

「やっと帰ってこれたとき、みんな暗かったもんなあ」

太一は思い出して微妙な表情をしていた。太一とヤマトはそれはそれで大変な目にあっていたのだが、それはまた別の話になる。

「で、あの震災」

「そうそう、太一さんたちはともかく、日本にいてあれを知らないなんてことありえないでしょう。まして東北にいて」

「そいつ、知らないって言ってたんだ」

京が言ってるのは昨日ここに現れた人物のことだった。

「ほかにもなんだかおかしいっていうか、気になるっていうか、ズレてるいろいろな出できちやって」

「とは言ってもそいつと会うの、初めてじゃなかったんだろ？」

「去年の今頃、一度だけ。ええと、太一さんたちの世代の人はだれも会ってなかったんですよね」

その人物と会ったことがあるというのは、京と大輔、タケル、賢、ヒカリ、伊織の六人だけだった。

「私たちもそれきり見なかったのがまた来て、でもどうも」

去年会った時の記憶が、京たちとその人物とでかなり食い違いがあった。

「私や大輔くんたちはだいたい同じで、彼一人だけ違うこと言ってる。でも、数の力で押し切っちゃうのもおかしいし。話聞いているとそれまで暮らしていたっていうところの住所も見つからなくて」

「それで現地に行ってみよう、ってタケルが連れてったのか。東北まで」

「ちょうど丈先輩のお兄さんがあっちにいるからって」

「シウさんかあ。タケル、妙に話が合うみたいなんだよな」

「まあタケルくんが連れ出したわけはそれだけじゃあないんですけどね」

雪はかなりなくなつたとはいえ青森はまだ寒い。

町から少し山側に登つたところで止めた車から、なにもない野原に足を踏み入れた城戸丈の次兄、シュウが振り返つた。

「ここで間違いないんだね」

君の言つてた住所、暮らしていたところというところは。

シュウはひよろりとして頼りなさがいつまでも抜けない丈に比べると、ややがっしりして背も高い。軽く見える上着は見た目よりも耐寒性能に優れている。フィールドワークに向いたものだ。内蔵されたポケットには大きく丈夫なノートがはいつているが外見ではわからない。

そのすぐ後ろについてた高石タケルも振り返る。薄い上着に厚手の長袖Tシャツという身軽な服装に見えるが、ブーツだけはしっかりしたものを履いていた。

「そうだね、ルイくん」

前日に研究所に現れた青年、大和田ルイは車の横で呆然と立ち尽くしていた。野原の先に彼が暮らしていた親族の家があった形跡など、かけらもなかった。

「震災のこともそうですけど、京くんたちと出会ったときの記憶、それより前の光が丘の記憶がそもそもおかしかつたんですよ」

やっと研究室から応接室に来た泉光子郎が紅茶を一口飲んだあと話しはじめた。

「ずっと光が丘に暮らしてたって言ってたんだな」

太一は珈琲にしている。本当はビールに行きたいところだが、光子郎の話聞き終わるまではそうもいかない。そもそもこの研究所にビールはあつたけ、と思いつながら話を聞いていた。

「そう、十年前、二〇〇三年まで。なのに、彼が戦うデジモンをみたのはその二〇〇三年の春、テレビ越しが初めてだったというんですよ」

一年前、そのルイと京や賢、大輔たちとルイが出会った時、東京タワー近くに巨大なデジタマが出現していた。ルイと大輔はそのデジタマに乗り込んだ。

「で、小さいときのおれとヒカリを見たんだ」

デジタマの中で大輔は光が丘の過去の映像を見ていた。

「それで大輔くんはそのデジタマの中にある世界が一九九五年の光が丘だと思っ
たんです」

その後にルイの家庭の様子、ルイがデジモンと出会ったことも見ている。

「でもその後のグレイモンとパロットモンのことは知らない」

「次にルイくんが覚えてる、自分と関係ないデジモンのことはお台場のニュー

ス。アーマゲモンと戦った、二〇〇三年春のことです。その間に一九九九年夏に
光が丘で起きたマンモンとバードラモンの戦い、二〇〇二年の年末にやはり光が
丘であった戦いも知らない」

「さすがに無理がありそうだな。もう小学校も高学年だろ？ほんとは光が丘にい
なかつたか、別世界の光が丘にいたか」

「まだ別の解釈もできます」

「ほお、どんな？」

「ルイくんが言ってたウッコモン。すべての人にパートナーデジモンをもたらず能力」

ルイによれば一九九五年にルイのパートナーとなったデジモン、ウッコモンは、ルイの願いを叶えるために世界中の人類にパートナーデジモンをもたせるところにした。

「ただのデジモンにしては大きすぎる能力ですが、ぼくたちもデジモンのすべてを知ってるわけではないから可能性はゼロではありません。でもそれはルイくんが聞いただけの話で何も傍証がない」

そもそもウッコモンがいわゆるただのデジモンなのかどうかも怪しいが、と前置きしてから光子郎は続けた。

「願いを叶える世界、というより形にすることができるとあることは、ぼくたちも知っています」

二〇〇二年の暮、大輔たちがベリアルヴァンデモンと対決していたのがまさにそういう場だった。

それに近いことは光子郎たちも覚えがある。最初にデジタルワールドに行った時、電源がなにもない場所でパソコンの電源が入ったり、柔らかいはずの帽子が固くなったりという現象が起きた。だがそれはデジタルワールド全体の不可思議さの中ではそれほど気にすることではなかった。

「願いを叶える能力、という漠然としてますが、デジモンを生み出す能力くらいならそういうこともないとは言えない」

これまでにも想像以上の能力を持つデジモンたちを何体も見てきている。

「ただ多分べらぼうなエネルギーが必要で、まして量産するとなるとんでもない作業量になります。とてもいちデジモンができることとは思えない。」

それよりはルイくんにはそれは自分がやったことだと思わせるだけのほうが実現性が高い」

「騙したってことか」

太一は言うてからそれも少し変だ、と思ひ直した。

騙したというのなら、パートナーデジモンの増加は自分の力と思わせることがそれだ。だが、その時点ではそうしたデジモンはいなかった。その後増えていくという確実な予測ができてなければならぬ。

「記憶を少し改変したのかも、です」

「なんの」

「まずは年代の」

ここからは仮説でしかありませんが、と光子郎は続ける。

パートナーデジモンがこれから増えるのを知っているのではなく、すでに増えつつあるのを知っていればその後も増えるという予測は立てやすい。

ルイの記憶で一番動かせないことの一つは誕生日だろう。うるう年の二月二九日生まれ。大輔たちと同じ学年というから一九九二年生まれのはず。

「もしそれがひとつ後ろにずれていると、一九九六年生まれとなる。生まれたのがその年なら、説明がつきやすいこともあるんです」

九六年生まれなら九五五年や九九年のことを何も知らなくても不思議はない。二〇〇二年の暮のことは微妙だが、それでも六歳だ。

「じゃあ大輔が見たっていう一九九五五年の光景は」

「大輔を目撃者にして僕たちにトリックが仕掛けられたとしたら」

「トリック」

「そもそもがデジタマの中で見ただけの過去の映像なんです。それもわざわざ大輔くんに見せるための素材を選んでるみたいですよね。

二〇〇三年春のアーマゲモンとのニュースは本当にテレビで見たのでしょうか。もしかしたらそれがきっかけでルイくんの元にウツコモンが現れたのかも。そして記憶を改竄することになった」

「その仮説も証拠はないんだろう？」

「ルイくんの記憶でもう一つ確かなことは、両親が生きていないことです。事件性もあるから検索してみたら」

光子郎はパイナップルマークのタブレット端末を操作して、二〇〇三年の新聞記事を見せた。寝たきりの男性と介護疲れしたその妻の死体が発見され、一人息子は目に傷があるものの生きて発見された。

「続報が見つからないので詳しいことはわかりませんが」

息子に傷があるということは無理心中を図ろうとしたのかもしれない。

ルイの記憶では十一歳のことだ。それが四年遡り七歳となれば、精神的な衝撃はより一層計り知れない。そのタイミングなら記憶を操作する難易度もかなり下がる。ウツコモンは何年も前からルイのそばにいたということにしたのかもしれない。

「そして東北の親戚の家という世界に行くように仕向け、こちらの世界との年齢差を誤魔化すような生活をしてきた。もちろん最初に言ったように、ルイくんのことのがすべて本場で、そういう世界から来たという説も等価値なんです。これという決め手はない。でも今ぼくらの世界としては九九年の事件などをなぜ知らなかったのかの説明がついたほうが信じやすい」

京は感心して聞いていた。太一と光子郎だと会話のテンポがよすぎる。二人とも頭の回転が早く理解力が高いのだ。うっかりするとおいていかれそうになる。ここでやっと補足事項を話す機会が来た。

「ルイくん、大輔や賢くんと同じ学年にしてはひよろつとしてるなあと思つたんですよ。伊織より年下なら納得できます」

「本人が二十歳以上と思つてるだけかあ」

太一は未だにルイを見てないのだ。別の疑問も生まれた。ウツコモンはなぜそんなことをしたのか。

「マヨイガ、という伝承がある」

運転しながら城戸シユウが話していた。

「柳田國男の『遠野物語』で知られたけど、関東から東北にかけてある話なんだ。山の中にある幻の家。それとは少し違うんだけど、さっき行ったところ。青森の八戸は地名としては知ってるだろ。一戸から二戸、三戸と順にきて八戸、九戸、最後が戸来（へらい）。へらいって、ヘブライに似てるだろ。これはキリストが日本に来たという話もあって」

「シユウさん」

後部座席からタケルが話を止めた。

「あ、大丈夫大丈夫、脇道にはそれないから。」

その一戸から九戸までのあいだで、何故か抜けてるのが四戸（しのへ）なんだ。三戸の次の地名は五戸になってしまう」

その四戸に住んでいた、とルイは語っていた。

「江戸時代にはなくなったらしい。だいたい領地の分配とかで地名だけ消えたってことで説明が付いていることはついてる。でもちよつと変な感じがするよね」

それだけじゃなくて、と続ける。

「そのあるはずがない四戸に関する目撃談というか、体験談のようなものが現在でもたまに出てきてね。それも今回調査の目的の一つだったんだ」

シュウは民俗学の学者で伝承の現地調査も多い。

「助教になったばかりなのに、忙しいですね」

「給料安いしね。おかげでこの車もいつまでも新調できない」

「それにしても」

タケルが少しルイを気にしながら言った。

「本当に何もなかったですね、四戸」

「さっきのあたりと別に四戸城と呼ばれた城跡もあって通り道だから、一応行ってみるけど」

「なるほどな。その、ルイのことは少しはわかった」

研究所の応接室での太一たちの話は続いていた。

「でも、記憶の問題だけで言えば」

光子郎が視線を落とし気味に言う。

「ぼく達も九五年のことはあまり覚えてなかったですからね」

「そりゃまあ、そうだなあ。俺でも小一だったしな」

太一たちは九九年に光が丘を再訪した時に突然思い出したのだった。

京も賢の言ったことを思い出していた。

「賢くんも、悪かった時のことはあまり思い出せないって言うし。でもその前のこと」

賢が別のパートナーデジモンを持った少年と共に何かと戦ったことがある気がする。京に言ったことがあるらしい。光子郎もそれは聞いた気がする。

「本当に記憶の問題なのか、それとも」

研究室から来た女性が話しに加わった。

「その記憶通りの世界から、この今の世界に来てしまったのか」

「あー、メノアさんも似た立場でしたねえ」

光子郎と同じ研究所の作業服に、今はショートカットにしている女性、メノアは、京の隣に座って話を続ける。

彼女もルイと同様に今ここにいる太一たちとは違う記憶を持った人間だ。太一と歳は同じなのだが、アメリカの大学でデジモンの研究をする教授にまでなっていた。そして太一たちを巻き込んだ戦いまでした。彼女にだけそういう記憶がある。

「でも私の記憶にある世界は」

一度言葉を切った。

「もちろん、一番違うのはモルフオモンがいたかどうか、だけど」

「メノアさんのパートナーデジモン」

「そのデジモン連れて飛び級で大学の教授にまでなった人間の存在を、イジーが気がついてなかった、そういう世界だったのよ」

「そのイジー、て呼び方はよしてくださって」

光子郎がやつと口を挟む。

「ああ、そうだったわね、社長」

「その社長、も」

「そうそうそうでした。この世界では所長。でも私の記憶にあったイジー、いやイズミ・コーシローは会社の社長だった。まだクセが抜けなくって」

わざと言ってるのが見え見えだがそういう性格らしい。

「それ、泉先輩が社長だったって、そういつてたのメノアさんだけじゃなかったですもんね」

「所長でも社長でも、私みたいな存在のことを気が付いてないとか知らないとかわからないのよ、この人が。それはここで一緒に研究するようになってよくわかったわ。情報収集量が桁違い」

「まあ、この研究所もメノアさんのおかげで設立できてるわけですし」

光子郎がそういうのは照れ隠しなのかもしれない。実際に設立資金の半分はメノアが負担して実質的には共同経営者なのだが、あくまで所長は光子郎だと言うことにしたのもメノアだった。

「社長になるのと同じくらいの資金は、私の記憶と同じように特許料で稼いでたんだから、そこは間違っていないんだけど。ほかにも」

あまり以前のことを口にしなくなっていたメノアだったが、ルイがきたことで記憶が蒸し返されていたようだ。怪しい助手のことなどいくつか自分の記憶すらあやふやなところがあると例を挙げたあと

「何よりなぜ自分があんなこと思いついたのか、どうしてそういう結論に至ったのか。よく思い出せないのよ」

メノアは少し視線を落とした。

「《大人になったら可能性が狭まる》なんて」

「それにしてもさ」

太一が口を挟んだ。

「日本語うまくなつたよな、メノア」

「でしよう」

メノアはニツコリと返した。

「そうそう、所長だけじゃないわ、タイチたちも」

ヤマトや丈、ミミ、そのときは会ってなかったが空も。

「私知ってる人たち、記憶の中の人たちと今のあなたたちとは、決定的に違うところがあった。ダイスケやミヤコたちもね。それは昨日、ルイくんの話聞いたときにも言ったのよ」

「この人たちなら、あの時」

前日、メノアはルイにこう言った。

元の自分のパートナーデジモンだったはずのものとの決着をつけた時のこと。

「別の解決策を探したに違いないわ。それはたぶん、あなたのときにも」

ルイはその言葉を思い出していた。

四戸城跡、金田一城趾ともいわれる辺りにも自分が暮らしていた痕跡はなかった。それでは自分は今までどこにいたのだろうか。去年、大輔たちと会ってあんな事になったというのはどこまでが本当のことなのか。いや、そもそも、両親が生きていたと思つてた頃の記憶はどれくらいが事実なのか。

その様子を見ていたタケルが話しかけた。

「最初にパタモン、ぼくのパートナーデジモンと出会ったときはね」

随分といろんな経験をした。しかしそれは、この世界ではわずか数日のことだった。

「個人的な体感では半年以上か、もっと長い間だった。すごいずれがあつてさ。そのあとしばらくクラスの子と話が合わなくなったりして」

時間よりも精神的な変化のほうが大きかったのかもしれない。

「あの時のことは夢か何かだったのかなあ、そんなはずはないし、そうじゃないほうがいいなあ、みたいなことばかり考えてた。辛いこともたくさんあったけど、いいこともあったからね」

「あの、よかったら」

ルイが数時間ぶりに言葉を出した。

「その話、もっと詳しく聞かせてもらえませんか」

「え、それはいいけど」

「時間はたっぷりあるよ」

運転席からシュウが声をかけてきた。

「何しろこの車で東京まで行くんだ、結構かかる。夕飯には間に合わないかもだからね」

「そうですね」

「それに、ぼくも丈や兄さんから断片的に聞いてるだけだ。まとまった話は聞いておきたいな」

「あ、そうか。じゃあ、あくまで僕の立場から見た話ですが、それでよければ」
タケルはペットボトルの水を一口飲んでから話し始めた。

「最初はサマーキャンプだったんだ。兄さんの学校が夏休みに山に行くからって、うちの親同士が何か連絡取ってくれて、ぼくもそこに参加することになった」

ルイは長くて短い夏の話の聞き始めた。

「ジュネーブはどうでした」

光子郎が尋ねた。太一は頭の後ろに手を組んで見上げる。

「ああ、それがさあ。全くあの狸おやじども。まあカトリーヌの親戚さんがいたから何とかとりなしてもらってきたけどさあ」

カトリーヌは二〇〇二年の年末に最初にパリに行ったとき知り合った、フロラモンをパートナーに持つ女性だ。フランスの政財界に顔が利く一族らしい。太一は、国連の人権委員会に証人として呼ばれ帰国したところだった。

年に二倍ずつ増えていくパートナーデジモンを持つ子どもたち。彼らがまだ少人数のうちは、アメリカやインドの裕福な家にいる。パートナーヒューマンの敷地内、広大な庭や牧場などに生活の場を設けることができた。周辺目をごまかせなくなる前に、その場を少しずつデジタルワールドに移していった。

おそらく地球と同じくらいの広さがあるデジタルワールドには、人はいないが使える建築物も多数ある。場所を選べばかなりの人数が寝起きが可能で水や食料の供給に不便がないところもあった。周辺に危険なデジモンがくる場合もあるが、そこにいるのはパートナーデジモンと共にいる子供たちだ。自分の安全は最低限守れた。そうした保護区が幾つか生まれ、大輔たち以降の世代で大学生位になつてきた者たちが交代で面倒を見るという体制も生まれてきた。彼らもいつもはパートナーデジモンと離れて暮らしているので、たびたびデジタルワールドへ行きデジモンと過ごす時間ができたことが嬉しいという側面もあった。

救い出した子どもの数も増えることで太一たちの救助活動も密かに注目を集めてきた。人間社会からは拉致誘拐犯ではないかという見方も出る。そうした中で国連から接触があり、人権委員会の秘密会議に太一が代表として行ってきたのだった。そしてなんとか非公認ながら国連に活動を認めてもらったらしい。

「向こうにいる間ちゃんとした服装してなきゃいけないのも窮屈だったけどさ」

今の太一はいかにも気楽なパーカー姿だ。

「行き帰りにず〜っと飛行機でじつとしてなきやいけなかったのがさあ」

「いつもゲートからデジタルワールド経由ですもんねえ」

口ではめんどくさそうなこと言っても、そんなややこしい大人たちをうまく丸め込んできたのはさすがは太一さんだな、と思いながら京が答えた。

「それよりさっきの話」

太一は光子郎とメノアに少し視線を向けた。

「もう何人目だっけ？ おれたちより前にパートナーデジモンがいたって言うてきたのは」

「直接会ったことがあるのは五人、話だけ聞いてるのが四人、いや五人かな」

「何だか光子郎にしちゃ歯切れ悪いな」

「足すと八人を越えるんですよ。僕らの代が八人。その後の増加数から逆算してそれまでには七人のはず」

光子郎や太一たちがデジモンと出会ったのが一九九九年。その年は彼ら八人だけが新規のPHで、その後は年に二倍ずつ増えている。遡ると一九九八年には四人、その前年は二人、一九九六年が一人で計七人のはずなのだ。

「それが八人以上となるとそこでもう数が合わないんですが、そもそも最初にデジモンに出会ったという年代もおかしいですからね」

「だからイジーは、私たちが平行世界から来たんじゃないかって言う説も持ち出してくるのよね」

メノアが引き継いだ。

「私と、他の人達ではまたそれぞれ別の世界かもしれないけど」

「出会いが一九九五年より前と言われると、現状と合わなくなってしまうです」

光子郎のいう例はメノアやルイとは違う人物たちのことだ。

「それが五人と言われたらなおさら」

「実際にそう言ってるのは一人だけだけだな」

太一のいうその五人のうちの一人は、もう一人の眠る病室にいた。

神奈川県半島の丘にある療養所。周囲を林に囲まれており、町と少し離れてるため訪れる人は少ない。療養所というのさえ仮称で、ちゃんとした病院名があるのだが通ってくる老人たちにはずっと前から療養所と呼ばれている。建物自体が小さいわりに入院室も備えているが、二年前からずっと意識不明の男性が一人ずっとベッドにいるだけだ。

「え、今なんて！」

姫川マキはナースコールを押しながら、ベッドに寝てる男、西島に問いかけていた。

病室の戸が開き、ツンツンした髪をなんとか帽子で抑え込んでる看護師が飛び込んできた。

「どうされました」

「今、しゃべったの。意識が戻ったみたいで」

「先生呼んできます！」

看護師は戻っていったが、西島の意識はすぐには戻らない。

その男、西島は太一たちが高校生の頃、担任の教師だったという。それは偽りの姿で、本当は政府関連の機関の調査官。かつてはパートナーデジモンがいた。太一たちを巻き込んだ長期にわたる事件の後、死んだはずだ。そう語ったのは、ずっと付き添っている質素な服装をした女性、姫川マキだった。彼女も同じ機関に属し、やはりパートナーデジモンがいた。他に三人、計五人が《選ばれし子ども》だったというのだ。

この姫川マキの言う過去の出来事が、光子郎の仮説と矛盾する。太一たちの前の世代なら五人という数自体も多いようだし、それよりも五歳以上離れていて年齢が上すぎる。

数年前、姫川は闇の中へ消えていき、そこで一旦記憶が途切れた。意識がもどつてからは、彼女が所属していた機関など存在せず、死んだと思つた西島が生きてることだけはわかつた。ただ西島は昏睡状態にあつた。彼がいた病院でそれまでのことを話すと、どういうルートから話が伝わつたのかこの療養所に移るように促された。自分も近くに狭い部屋を借り、通うことになつた。彼女の記憶の中にあることが本当なのか、よく似た別の世界に移動してしまつたのか。どちらにしても何かを解明する鍵は西島で、彼が意識を戻してくれることにしかない。彼女はずつとその時を待つだけだつた。

この療養所は建物だけでなく院長もかなり高齢で、西島と一緒にここにきた若い医師が副院長として主な業務を回していた。

「ほんとかい、本宮くん」

城戸丈の長兄で副院長の城戸シンは、椅子を半分だけ回して横目で見たまま、まだ立ち上がる気配がない。最近かぶる人も少なくなつたナースキャップの傾きを直しながら、本宮大輔の姉・本宮ジュンは答えた。

「ほんとですよ!! すぐ一〇四号室に」

「その前に」

シンは部屋の片隅を指さした。

「君のデジモン、あまりうろつかないようにしておいてくれないかな」

「あゝゝゝ、コドちゃん!」

ジyunはデジモンを持ち上げた。

「あまり人が来ないとはいえ、患者さんが驚いたり嫌がられたりで変な噂が」

「ええ、ええ、わかってます!」

「悪い子じゃないのはわかってるんだけど、その外見がね」

まだ小さいがクモの形をしたデジモンだ。

「そう! 悪い子じゃないんです! だからここでおとなしくしててね」

柵の下に隠して蓋を締め、ジyunが振り向くとシンはスマートフォンを手にしていた。

「とりあえず丈に連絡しないとね」

「すぐ療養所に来てさ」

城戸丈は大きなバッグの中のゴマモンに話しかけた。

「シン兄さんからじゃあしようがないよねえ。で、何の用なの」

「西島さんが目が覚めたかもって」

「あらずつと寝てた人」

「まあ今日あまり忙しくなくて、ちょうどよかったけど」

丈は研修医だ。勤め先が父のいる病院なので多少の無理は効く。というより、何か起きた時のために便を計りやすいように父が手配してくれていた。息子がパートナーヒューマンということに対して彼なりにできる心遣いがそういう形なのだ。

「日が暮れる前につきたいなあ」

丈はバッグを抱えて駅へ向かった。

「西島さんの意識が戻ったんだって」

デジタルワールドに幾つかある保護区の一つ、穏やかな高原にぽつんとあるコンクリートの塊のような建物の一室で武之内空が八神ヒカリに言った。空は青いスポーツキャップに明るいピンク系の長袖Tシャツ、半袖Tシャツを重ね着してジーンズの上に腰にも長袖を巻いている。何かあったときに人に貸せるような用意だ。ヒカリはパーカーワンピースでポシェットにデジヴァイスが入っている。一見シンプルだが下に七分袖のトップスにキュロットを着用してるので、このワンピースも必要な時には敷物に転用もできる。

二人がいる建物は近づいてみると意外に大きい。単一のものでなく、いろんな建物が合体したようだ。香港から来たシャコモンをパートナーデジモンに持つ三兄弟は、物心つく前に解体された魔窟のような建物に似てると喜び、こう呼び始めた。

《九龍城寨》

高原の少し上にあるかなり大きな湖から水を引き込む工事は普通ならかなりの人手が必要だったろうが、三兄弟とシャコモンたちの奮闘でかなりの短期間で完了。おかげで現実世界からこの保護区への子どもたちの移送が早められた。デジタルワールドにたまにあることで、この建物も出どころがよくわからない電力を利用することもできる。それで現在収容されてる三十人くらいならあまり不自由なく生活できる。その安定性には疑問もあるので、太陽光パネルと蓄電池を導入、現実世界との通信用のパソコンを備えたのがこの部屋だ。

「すぐまた元に戻ったみたいだけど」

「西島さんのことなら、メイさんに言った方がいいですよね」

「そうよね、あの人たち同じグループだから」

空と同じ年齢の望月芽心（めいこ）通称メイは、パートナーデジモンがいないままこの保護区に定住して、子どもたちの世話をしている。

彼女は姫川マキ、西島大吾と共通した記憶がある。彼らや太一たちいろいろな体験をした、という。空やヒカリにはその記憶はない。

「じゃ、すぐ呼んできます」

「あ、その西島さん」

空が呼び止めた。

「一言だけ言ったって。西島さんが」

空が迷うような目をするのは珍しいとヒカリは思った。なぜそんな目をするのかはすぐに分かった。

「クライウミ、って」

「それって……あの、暗黒の海のことじゃ……」

ヒカリはすぐには動けなかった。

「その海なら」

車の中で長い話を聞いていたルイが、やっと口を挟んだ。

「ぼくも行ったことが。いや、行ったことがある気がするというか。あまりはつきりしないんだけど」

タケルが語る小学生の頃に体験した話は、すでに二度目の大きな事件がおきた二〇〇二年のこととなっていた。春から年末までの出来事で、今は初夏のあたり、普通のデジタルワールドとは違うところに行った時のことだ。

「ぼくも実際に行ったのは一度だけけどね。ずっと嫌な気分がしてたなあ。あの時だけのイレギュラーなゲートの開き方をした」

ずっと霧に包まれたような薄暗い海辺の町。

「ぼくとヒカリさんだけじゃなく、その前に賢も行ったというのだけど、やはり記憶がはつきりしないって言ってたよ。大輔たちはゲート越しに見ただけじゃなかったかな」

「ここではなく、その、デジタルワールドでもない世界。他にもそういうところがあるのだろうか」

「君が住んでたはずの町もその一部かもしれないよね」
運転席からシュウが会話に加わった。

「だとしたら、ちよつと羨ましいかなあ。ぼくはこの世界の他は、デジタルワールドにちよつと行ったことがあるだけだから」

ルイはちよつと驚いた。

「え、シュウさんも行ったことあるんですかデジタルワールド」

「だからちよつとだけだよ、ほんのちよつと」

「シュウさん、その話はややこしくなるから、また後で」

タケルが軌道を戻した。

「続き話していいかな。その暗黒の海にいたのがまた不気味なデジモンで。

いや、ほんとにデジモンだったのかどうかもわからないけどね」

穏やかな口調に何かごまかされてるような気がしたが、ルイは黙って聞き続けた。タケルの語る、太一たちとアグモンたちの物語はそれほど引き込まれるものだったのだ。

しかしそれならば自分は、自分の体験したことは。記憶は。

(もうすこし聞くといいよ)

頭の中に声が聞こえてきた。

(一度区切りが来る。質問はそれからでも遅くないよ)

これが初めてではなかった。数日前からときどき聞こえてきたこの声に導かれて光子郎の研究所を訪ねたのだ。

きみは、だれだ

(ほら、今いいところだ。一乗寺賢のことがわかるよ)

そうだった、ここまでのタケルの話に出てくる一乗寺賢はルイの知るいつも穏やかで優しそうな賢とはかなり違ってている。今それが大きな転換点を迎えようとしていた。尋ねたいことは後でいい。ルイは聞き入った。